

「2017年ベトナム・ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム 参加報告書」

京都大学大学院法学研究科修士2年 康村 博宣

本プログラムに参加する以前に抱いていたベトナムのイメージとして、遅しさと活気があり、言語はラテン文字を使用している分、外国人にも習得しやすい、という印象があった。前者はまさにその通りで、建設中の高架鉄道のそばで、無数のバイクが往来する中、騒音や渋滞にもめげず遅しく生きる人々の姿は、明日への希望を感じさせるものであった。後者について、ベトナム語は、文法がシンプルな反面、細かな発音や声調の違いによって意味が全く異なり、地名や料理名であっても伝えるのに一苦労した場面があった。

海外での経験として斬新だったのは、受け入れプログラムで仲良くなっていた友達の家を招いて頂いたことである。日常の生活を肌で感じることができ、家族を大事にするベトナム人の思いやりに触れることができた。言葉が通じず、もどかしい思いをすることも時にあったとはいえ、食事をともにしながら、音楽を聴いたり、歌ったりする体験を共有する中で、楽しい時間を一緒に過ごせることを実感した。

日本語の授業に参加した際には、ベトナム人学生が懸命に話しかけようとする姿勢に、言語学習に対する意識の高さを感じさせられた。意欲的に学ぶことがいかに楽しいことか、それは現代日本の若者が見失いつつあることではないか。自戒も含めつつ、そんな思いが湧いた。

最後に行く共同発表については、どのような形になるかが分からないまま現地入りしたので、一抹の不安もあったが、結果的には京大、ULIS、USSHの三大学共同発表の形になり、成果が達成できたように思う。我々のグループでは、日越の若者の考え方について幸福観を軸に比較検討を行った。その結果、日本の若者は食事を一人で食べることが多く、家庭よりも仕事を優先する傾向にあることが明らかになった。都市化による個人主義の強まりは、技術の進歩により個人で完結できる事柄が増える一方で、自己責任の領域がかつてよりも拡大することと表裏一体である。豊かな社会が実現した際に、個々人が何を生きがいにするか。「生きがい」の有無は、困難な時代を生き抜くための重要な要素であり、政策面として、とりわけ教育分野においていかに表象させていくかが今後の課題になってくると思われる。

私は現在のところ主に国内法を学んでいるが、グローバル化による国際競争、外国人労働者の受け入れや国際結婚における課題についても今後ますます重要性が高まってくるだろう。今回のプログラムも含め、これまでに得た海外での経験を活かしつつ、国際私法の分野においても貢献していくことができれば幸いである。